

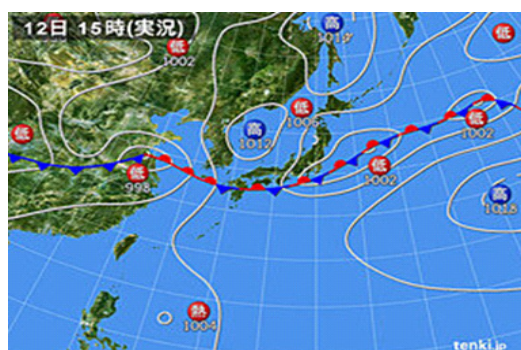
令和2年7月豪雨の要因を分析 梅雨明け後の気温は？

気象庁は熊本県南部球磨川水系・福岡県南部・大分県玖珠・日田地域の筑後川水系、島根県江の川と広範囲にもたらしたこの水害を『令和2年7月豪雨』と命名した。今までの慣例では災害が一段落してからその規模に応じて命名してきたが、そのさなかに命名したことは異例の事態であり、政府は特定地域災害を指定して災害復興に迅速に取り組むよう関係省庁に指示した。今回の九州や中部地方を襲った豪雨災害については、その気象庁の予報がハズレる事態になってしまった。気象庁が発表した中国地方の一か月予報では7月11日からの1週間は前線や湿った空気の影響を受けにくいとしていて、例年よりも早い梅雨明けが予想されていた。しかし、7月10日に発表した一か月予報では、前線や湿った空気の影響を受けやすいと、180度予報を転換し大雨が続く危険性を示した。災害が発生した地域では1か月の雨量がたった1日で降ってしまったなど過去の記録を大きく塗り替える事態に見舞われている。気象庁では梅雨入り、梅雨明けの発表を9月に見直している。梅雨は季節現象であるため、ここで梅雨が終わったなどと線引きするのは難しいからだという。9月の台風シーズンにおいて天気予報でたまに梅雨の時期の修正を説明する気象予報士がいるが正にそれだ。過去10年において気象庁は2年に一回の頻度で最初の発表を後に修正している。今回も梅雨前線の動きによってその予報が「修正」される可能性が出て来ている。気象庁異常気象情報センターによると、梅雨前線に伴う記録的な豪雨は日本列島を西から東に吹く「偏西風」が南に蛇行したことによって起こった可能性があり、また7月中・下旬と全国の梅雨明けが遅れる可能性もあるとしている。偏西風は通常、中国大陸から日本列島に向かって西から東に吹いており、7月上旬は朝鮮半島付近で南に蛇行、この影響で普段は東西に伸びている梅雨前線が傾き、南北に伸びた日本列島に添う形状に変化させた。通常は列島の一部としか交差しない梅雨前線が広い範囲で列島を覆い、広範囲において降雨を生んでいる。九州から山陰や四国地方にかけて帯状に局地的な集中豪雨が続いた「線状降水帯」がまさにそれだ。この線状降水帯が発生する理由として太平洋高気圧の停滞があげられている。平年はこの太平洋高気圧が勢力を強めることで梅雨前線が北上して梅雨明けを迎えるのだが、7月上旬からはほぼ同じ位置にとどまっている。太平洋高気圧が居座っている理由については、インド洋など熱帯付近で雲の発生が活発になった影響などが考えられるようだ。日本だけではなく、この大雨の被害は日本の西の先の中国の長江流域でも線状降水帯による豪雨に見舞われ水害の危機が報じられている。この長雨の影響で果樹では細菌病類の発生や果菜類では実の充実不足による腐れやつる枯れ病が、水稻では中干し作業が充分に出来ない事やイモチ病が確認され始めており注意が必要となっている。

梅雨明け後の気温は？ 梅雨明けのカギを握るのは太平洋高気圧の動向

待ち遠しい梅雨明けだが、本紙発行の7月23日時点において太平洋高気圧の勢力は強くなる予報となっている。平年の梅雨明けだが、九州では20日前に中国・四国・東海・関東甲信では20日過ぎから、北陸・東北部では25日、東北北部では28日前後となっている。23日過ぎから西日本を中心に晴れマークが見られるようになってきた。気象庁の最新の1ヶ月予報では本格的な夏シーズンは全国的に気温が平年と比べ高くなる予報が出ている。梅雨明けと同時に厳しい暑さがやって来るためマスクをしての外出は更に息苦しくなることだろう。災害の復旧作業も暑さと

(次ページへ続く)



令和2年7月豪雨の特徴となった天気図
 中国内陸部長江付近から伸びる梅雨前線が九州南部に停滞し豪雨をもたらした (tenki.jp より)

(次ページへ続く)

の闘いとなりそうだ。また、熱中症には十分な注意が必要だ。特に夏休みが短縮された小学生が一番暑い時間帯に下校するため、子供たちが熱中症にならないよう気をつけてあげて欲しい。コロナ感染防止対策を意識しながらの体調管理には充分にお気をつけください。

北海道の作物風景

九州各地で豪雨被害が拡大している。農業被害も起き、政府は豪雨復旧に経済対策を取りまとめる方針を決めた。各地の復旧には時間も労力もかかる。出荷作業のある農家や農地が心配である。青果物流通への影響も懸念される中、市場の取引は果菜類や切り花の一部で入荷が落ち込んだ情報もある。また今後も大雨をもたらす線状降水帯が発生し豪雨になる可能性もある為、引き続き注意が必要だ。東・西日本も豪雨の恐れがあり、土砂災害嚴重警戒を呼び掛けている。全国各地で大雨被害が発生し注意が必要だ。北海道は6月下旬に日照不足が続き、農産物生育の遅れに懸念が出ている他、曇りの日が多いことから、牧草の収穫に遅れが生じている地域もある。札幌管区气象台によると。6月15～28日までの日照時間は帯広が6.8時間（平年比10%）、北見枝幸が8.8時間（同13%）、雄武10時間（同15%）など。道内では6月15日ごろから低気圧や湿った気流の影響で日照時間が少ない状況が続いている。十勝農業改良普及センターは、現時点で農作物の生育は平年並みとするが、影響が出るのであればこれから。日照不足が続いた場合、馬鈴薯の茎が軟弱に育つ可能性があるとして注意を促す。オホーツク管内でも日照不足や降雨が続く。北見市常呂町のJAところは、低温や多雨が続けば、病害虫のまん延が懸念されるとし、防除対策を徹底している。空知農業改良普及センターは水稻の生育は平年並みで進んでおり、現時点で大きな影響はないとする。ただ、日照不足が続くといもち病にかかりやすくなったり、小麦は実が細くなったりする心配がある。同センターは、天候は回復傾向にあるとし、今後の状況を注視するとしている。酪農が盛んな地域では牧草収穫に影響が出ている。根室農業改良センターは雨や曇りの日が続く、ロールバールサイレージの作業が難しい状況が続いている。同センターは、全体として4、5日ほど遅れが出ていると指摘する。釧路農業改良普及センターは、収穫作業は全体としては平年並みとする。ロールバールサイレージの作業は難しいが、きざみで牧草を収穫する作業は進んでいる。網走農業改良普及センターでは、収穫作業が遅れていると指摘する。今後も注意が必要だ。北海道の農産物は生育真っ只中で、色とりどりの風景を楽しませてくれる。各地の作物の生育状況を写真に撮ってみた。今年はコロナ禍で観光客が例年押し寄せている観光名所も人がまばらで渋滞にも巻き込まれずスムーズに見る事が出来る。土産物店などは閉まっており寂しい状況ではあるが、作物は変わらずキレイで見ごたえのあるものだ。美瑛の風景は有名である。この時期バレイショの花が咲き、麦の色づきとの良いコントラストを写真に収めるカメラマンが何人も居た。また富良野のラベンダーも満開で香り良く、キレイに咲いている。ビート、バレイショ、麦、タマネギもそれぞれ葉っぱが大きくなっており、比較的順調に生育していると思われる。このまま順調に農産物は育ってくれることを祈る。7月中旬以降は早期天候情報によると高温になる予想だ。平均気温が平年より2.6度以上も高くなるとして、気象庁は農作物や家畜の管理に厳重に警戒するよう呼びかける。天候に左右される農業ではあるが、災害が無くなり、穏やかに農業が出来るように、各地の対策が急務である。(札幌支店)



馬鈴薯（撮影地 留寿都）



ラベンダー（撮影地 富良野）

令和2年7月豪雨にて被災された方々に心よりお見舞い申し上げます。一日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。次号は夏季休刊を頂きます。次号は8/26発行予定です。編集事務局：南部、助川
電話：03-5275-5511/E-mail：macjournal@mcagri.co.jp URL <http://www.mcagri.jp>